

# 学内六報

2024.1.25

no.1578



田口和美像（1894年／高橋勝蔵画）



辰年に見たい、  
額縁の龍が  
見事な肖像画!

→p.10

東大が日本の大学として初めて署名した学術宣言

## DORAってなんだっけ?

## 業務改革総長賞授賞式

日本の大学として初めて東大が署名した

# DORA

The Declaration on Research Assessment

について、関わりの深い皆さんに聞きました

2023年12月1日、東京大学は研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）に署名しました<sup>\*</sup>。日本の大学としては初めてとなった今回の署名。その背景、経緯、意義、展望などについて、DORAとも関わりが深いオープンアクセス推進の動きとともに、3人の先生に座談会形式で紹介していただきました。



## DORAの 学術機関向け 勧告より

雇用、任期、昇進を決定する際に用いる判断基準が明示的であること、特にキャリアの初期段階にある研究者に対して、出版物の数量的指標やその論文が発表された雑誌がどのようなものであるかということよりも、論文の科学的な内容の方がはるかに重要であることを、はっきりと強調すること。

齊藤 これまで、雑誌ごとのインパクトファクター（JIF）<sup>\*</sup>という指標が研究者の人事選考の際に利用されることがありました。本来は業績自体を評価すべきであり、論文掲載誌の指標を人事評価に使うのはよくないというのがDORAの主旨です。私は3年前に前任の宮園理事からこの件を引き継ぎ、学内での検討を始めましたが、それ以前からDORAに関わっていたのが後藤先生です。

## 歪な論文システムへの危機感

後藤 2018年、ハワード・ヒューズ医学研究所と米国細胞生物学会が主催した研究評価に関する会議に誘われて唯一の日本人として出たのが発端です。いかに現在の論文掲載のシステムが歪んでいるかという議論に参加したのを機に、DORA運営委員会のメンバーとなりました。日本がこの件で遅れているという危機感を覚え、帰国後に宮園理事に話したところ、学術研究懇談会（RU11）に働きかけてくれたんですが、署名には至りませんでした。そこで、まずは東大か

らという方針に転換したんです。

齊藤 生命科学ネットワークでの議論を経て検討ワーキンググループ（WG）を立ち上げました。この問題がまだ知られていなかったのが、まず学内で問題意識を醸成することが大事だというのがWGの意見でした。次年度に立ち上げた検討委員会では、学術の多様性を守り発展させるには多面的な研究評価が求められ、DORA署名はその一環としてなされるべきだという結論でした。昨年4月に役員懇談会と科所長会議で検討内容を報告し、6月に科所長との意見交換会、8月には学内構成員と総長の対話集会を行いました。10月には学術推進支援室学術運営戦略部門会議で署名に際して示すメッセージ案を議論し、11月の役員会議での決定を経て、12月に署名しました。

後藤 JIFは私企業による一つの指標に過ぎず、信頼性の点、人為的操作の余地が残る点で懸念があります。分野間の偏りも問題で、たとえば日本語の媒体を主戦場としている研究者には不向きです。DORAの真の意図は、歪んだ論文発表

のシステムを正したいということ。論文発表は公的資金を受けて行った研究成果を社会で共有するためのものですが、これが大手学術出版社によってコントロールされ、研究者は論文を出すにも読むにも多額のお金を払わされています。出版社の雑誌は購入して読むものですが、研究者にしてみれば論文掲載料（APC）を払うことで、自分の論文を無料で読んで引用してもらえるようになります。つまり二重にお金を取られるようになったのです。近年、APCが高騰し、たとえばネイチャー誌に掲載するのに100万円～150万円ほどかかります。論文を読む際にも出版社が高価な料金を設定しているため、研究機関の負担は膨大です。こうした状況を生んだのはJIFです。

## OA化で鍵を握るのは図書館

齊藤 ほかの研究機関にもこの流れが広がることを期待しています。現在、どの大学でも学術雑誌の購読費高騰に悲鳴を上げています。さらに、近年は論文を誰でも無料で読めるオープンアクセス



## ◎DORA署名関連の会議体

用語	解説
学術研究懇談会（RU11）	研究大学のコンソーシアム（参加校は北大、東北大、東大、早大、慶大、名大、京大、阪大、九大、筑波大、東工大）。2020年度に東大からの議題提案で検討を行ったが、署名には至らなかった。
生命科学ネットワーク	総長室総括委員会下の組織。16部局が参画。齊藤理事の依頼に基づきDORA署名について検討し、東大が署名することを提言。
研究評価に関するサンフランシスコ宣言への本学署名に関する検討ワーキンググループ	学術推進支援室学術運営戦略部門のもとに、2021年度に設置されたWG（座長：佐藤岩夫）
研究評価の在り方に関する検討委員会	学術推進支援室学術運営戦略部門のもとに、2022年度に設置された委員会（座長：岸利治）

<sup>\*</sup><https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/actions/dora.html>

<sup>\*</sup>ある雑誌に掲載された論文が平均的にどれくらい引用されているかを示す雑誌ごとの指標。



坂井修一  
副学長  
附属図書館長

齊藤延人  
理事・副学長

後藤由季子  
薬学系研究科教授

(OA) で発表するために投稿者側が金を払わないといけないという問題が加わっています。そこで重要な任を担うのが大学図書館です。

**坂井** OA推進の動きは世界的に広がっています。昨年行われたG7の会議でも推進の方針が示されました。公的資金で支えられた研究成果の共有は当然です。OA化の方法としては、研究機関のリポジトリに登録して無料公開するグリーンOAと、出版社にAPCを払って無料で読めるようにするゴールドOAがあります。グリーンOAのメリットはお金がかからないことで、デメリットはパブリシティが低いこと。一方、ゴールドOAのメリットはパブリシティが高いことで、デメリットはお金がかかることです。機関リポジトリ（東京大学なら「UTokyo Repository」）で論文を公開するのは無料ですが、JIFがつかず、機関リポジトリに掲載した論文にたどりつく人は少ないという問題があります。ゴールドOAを行う出版社側は、専門家に論文を査読させたり、図を読みやすくする工夫を促すなどの編集業務を行っているとしており、その対価としてAPCの支払いを求めます。東大では複数の大手出版社とパ

ッケージ契約をしています。論文掲載誌を読むための購読料と出版社側が行うOA化の編集業務の対価をセットにした契約です。そこを担い、OAの側面でDORAと関わるのが大学図書館です。機関リポジトリと出版社のせめぎあいがあり、図書館は両者に気を配る必要があります。たとえばGoogleで論文を検索した際、機関リポジトリ掲載の論文は上位に表示されません。JIFの高い雑誌を優先して調べたいという需要がある限り出版社のページランクは上がる。機関リポジトリへのアクセスが増えれば、大手出版社の雑誌に掲載する価値が下がり、APCを高く設定することはできなくなります。DORAは価値の序列を変更するきっかけになるかもしれません。

### 25年から即時OA化が義務に

**齊藤** 出版社と協調することが必要です。将来的にはグリーンOAに移行するのが理想ですが、現状ではゴールドOAを選ばざるを得ません。国の政策としてOAに舵が切られ、2025年以降に公募する公的な競争的資金による論文に即時OAが義務づけられました。ただ、まだ現場の研究者に十分には伝わっていません。

**後藤** OAの義務化が進む欧米各国もほとんどはゴールドOAです。通常のグリーンOAだと査読がないのが問題。審査過程がないと研究者間で高い評価を得にくいのです。機関リポジトリに査読の仕組みが備わることが理想ですが……\*。

**齊藤** OA義務化に対応する検討組織が発足し、東大からは私が参加していますが、実際は出版社との価格交渉の問題になります。たとえば査読のノウハウは出版社にあり、大学側の体制は整っていない。出版社の力を借りるほかないのです。

### 出版社との交渉に連合で臨む

**坂井** 東大は昨年1月から大手3社と転換契約を結びました。論文閲覧のために大学側が支払うパッケージ契約のなかに、論文のOA出版のための費用を含むものです。その結果、全学で1億円以上の節約になりました。従来は個々の研究者が高いAPCを払って論文をOA化する必要があり、それがネックでした。大学がまとめて支払う形であればOA化は進みます。しっかり交渉して不当なAPCの負担を避けたいといけません。各大学図書館の職員が参加する大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）が出版社と交渉を行います。大学によって立場が違

うので交渉は複雑になるでしょう。

**後藤** ゴールドOAに際しては、査読を行う研究者に対価が払われるわけではない

### ●DORA署名状況(2023年12月14日時点)

署名数

164 国

3,064 機関

21,262 個人

<https://sfedora.org/signers/>

国	機関数	主な機関名
日本	17	東京大学、JST、理化学研究所、医薬基盤・健康・栄養研究所、東京大学定量生命科学研究所、量子科学技術研究開発機構、日本生化学会、生物科学学会連合
英国	268	University of Cambridge, University of Oxford, University College London, Francis Crick Institute, Institute of Cancer Research, Wellcome Sanger Institute
ドイツ	66	University of Stuttgart, DFG German Research Foundation
フランス	87	Sorbonne University, University of Burgundy, CNRS, Pasteur Institute
スイス	60	EPFL, ETH Zurich, University of Basel, Swiss National Science Foundation
米国	171	Howard Hughes Medical Institute, AAAS, Bill & Melinda Gates Foundation
中国	7	University of Nottingham Ningbo China, Chinese Mathematical Society

\*査読を経た論文（著者最終稿）を機関リポジトリに登録する方法もグリーンOAに含まれます。





ことを指摘しておきます。お金に加え、時間と労力の問題もあります。出版社の指示で研究者の時間が奪われ、要求される実験を行う若手の疲弊に繋がっています。論文を通そうと無理をしてひどいときには捏造すら起こる。商業誌への依存が減ればよくなることは多いと思います。

**坂井** 総合大学には学問の多様性が重要ですが、商業誌は世間受けする方向に流れがちです。お金だけの問題でもありません。流行する分野でお金がかかるのに加え、マイナーだが大学として重要な分野にお金が回らなくなる懸念があります。

**齊藤** DORA署名の前後で変わるこ

は実は特にありませんが、たとえば研究広報の際に「〇〇誌に載りました」と強調することは避けたいほうがいいでしょう。

**後藤** 本文に雑誌名を記すのは当然ですが、見出しに雑誌名だけを記すのではよくないということ。中身重視の姿勢を東大が示していることを若い研究者に知ってもらいたいと思います。

**坂井** JSTやJSPSのプレスリリースでも、記事の表題に雑誌名を入れるケースを目にします。東大の研究者が他機関と共同リリースを出すときにも注意が必要です。

### JIFも限定的な利用なら問題なし

**後藤** たとえば自分の範囲外の分野だと、定量的な数字があれば楽な面もあります。多元的評価の一つとしてJIFを限定的に使うことは許容されると思います。

**坂井** 実験すればどちらが正しいか決められる分野もありますが、結論が出ないところで議論をする分野も当然あります。深い知見を求める心を強く持つしかない。非常に大変ですが、大学教授は研究の評価にかなりのパワーを使うものです。新



しいことを言った人をきちんと評価することがより問われます。特にシニアの研究者がプライドをもって評価することが求められます。

**後藤** 理系でも、論文以外の側面、たとえば生データの価値が評価に繋がる面があります。生成AIではデータこそが大事。論文よりも元データを整備することが評価される時代が来る可能性もあります。

**坂井** 最近のサイエンスでは、0次データをまず保存してAIに読ませることから始めるアプローチが増えています。実は大手出版社はデータ主義のアプローチにも踏み込もうとしています。次はデータに関するDORAのような宣言が必要になるかもしれませんね。

## 鷗外は学殖無きを憂へたり学殖は寒き数字にあらず

坂井修一

### ●オープンアクセス(OA)用語解説

用語	解説
グリーンOA	研究者自らが自著論文を機関リポジトリなどに登録(セルフアーカイブ)し、無料で公開する方法。
ゴールドOA	論文出版料を支払うことで論文を無料で読めるようにする方法。
APC (Article Processing Charge)	論文出版料、論文掲載料などと訳される。フルOA誌への論文掲載、ハイブリッドOA誌で論文をOA化する場合に著者が支払う。
フルOA誌	出版される論文のすべてがOAで公開される雑誌。
ハイブリッドOA誌	雑誌自体は有料で、著者がAPCを支払った論文のみOAとするオプションを備えた雑誌。購読料とAPCの二重取りの問題が指摘される。
転換契約	一般的には、論文の閲覧のために大学等が出版社に対して支払う費用を、論文出版のための費用(論文掲載料)へと段階的に転換させ、それによって論文のOA出版の拡大を目指す契約のことを指す。

### ●出版社別の公表論文数とAPC支払推定額(2022年、上位10社)

順位	出版社名	公表論文数	OA論文数	APC支払推定額(円)
1	ELSEVIER	13,847	4,560	952,499,772
2	SPRINGER	9,647	2,509	790,338,240
3	JOHN WILEY & SONS	9,173	2,152	702,356,027
4	MDPI AG	7,174	7,166	2,130,602,032
5	TAYLOR & FRANCIS INC	3,005	678	210,746,523
6	AMER CHEMICAL SOC	2,796	256	90,129,122
7	OXFORD UNIV PRESS	2,694	1,102	238,419,192
8	NATURE PUBLISHING GROUP	2,504	2,402	902,421,484
9	FRONTIERS MEDIA SA	2,175	2,169	896,242,848
10	BIOMED CENTRAL LTD	1,990	1,982	682,031,302
	その他	30,083	16,675	2,752,681,002
	合計	85,088	41,651	10,348,467,544

国内機関所属の著者が責任著者となった論文のAPC支払推定額は、2012年には約12.5億円でしたが、2022年には約103.5億円に。国内からの公表論文数は上位10社で約65%を占め、APC支払推定額

は上位10社で約73%を占めています。  
 ※大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)の論文公表実態調査報告2023年度より。  
<https://contents.nii.ac.jp/justice/documents>



歌人としての顔も持つ坂井先生。研究評価に関するテーマで何か一首とお願いしてみたところ、右の歌をいただきました。昨年刊行された第12歌集の名は『塗中騷騷』(本阿弥書店)です。(広報課)

「註」「わたくしは学殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない」森鷗外『伊澤蘭軒』※右一首は広報課の求めに応じて為し物なり。文学作品にあらず(坂井)



# 自動化と生成AIと多様性がポイントに 業務改革総長賞

12月20日、業務改革総長賞の表彰式が安田講堂で開催されました。選考された7課題（総長賞1、理事賞2、特別賞4）と、継続的に業務改善に取り組んできた1部局に対し、藤井輝夫総長と角田喜彦理事（業務改革担当）が表彰状と副賞を授与。受賞者によるプレゼンテーションが行われ、会場・ウェビナー参加を合わせて延べ約800名の教職員が受賞を祝うとともに、優れた業務改革のアイデアを共有しました。

## 総長賞

RPA\*を利用した近距離旅費自動計算から振込処理まで/  
PAD\*を利用した就労管理システム勤務表らくらくチェック

近距離業務ツール作成  
チーム/勤務表らくらく  
チェック作成チーム



代表して表彰を受ける（左から）和田房子さん、永岩修也さん、麻生邦仁子さん

\*Robotic Process Automation ※Power Automate Desktop ※Visual Basic for Applications

### 取組内容

Excel VBA\*とPower Automate Desktopを組み合わせることで近距離旅費の経路・費用検索、決裁用資料の押印までを自動化。同じくPower Automate Desktopを用いた勤務表の要確認箇所の自動チェックツールを作成し月末月初に集中する勤務時間管理員の負担軽減を実現。

**評価ポイント** ◎職員が多くが日常的に接する事務業務の改善であり、導入効果が非常に大きい。◎本来構築に一定の知識が求められるVBA構築をChatGPTの活用で実現しており、今後の大学業務における生成AI活用事例としても意義がある。

## 理事賞

「体験活動プログラム」にかかる  
業務の持続可能なDX化

本部社会連携推進課体験活動推進チーム

### 取組内容

大量の申請書式により学生・職員双方に大きな負担となっていた応募手続きをMicrosoft FormsとPower Automateで簡略化。共通IDをキーにして各情報を紐づけることで反復した情報入力や手動転記による人的ミス無くし、ChatGPTを用いてRPAに触れたことのない職員でもシステムに触れることができるマニュアルも整備した。



29件の応募があった今年度の業務改革総長賞。「デジタルキャンパスの実現やD&Iを意識した業務の取組み」というテーマの下、応募課題にはDXに関する取組が多く見られました。

表彰後の講話では、生成AIに相談しながら自動化プロセスを進めたチームの新しいものを積極的に取り入れる姿勢や、一人一人異なる構成員の多様な観点を丁寧に掘り上げたチームの取組

に高い評価が与えられての選出となったことを総長が紹介。個々のアイデアを全学で共有して「世界の誰もが来なくなる大学」の実現につなげていくという呼びかけがなされました。

総長賞のチームには30万円（国内研修費）、理事賞のチームには10万円（自己研鑽費）、特別賞のチームには5万円（自己研鑽費）の副賞が渡されました。皆さん、おめでとうございます。

## 理事賞

日光植物園のD&I宣言 ~植物園全体の  
業務から私たちの「出来る」を見つける

理学系研究科附属植物園日光分園環境整備チーム

### 取組内容

植物園環境整備チーム（障害者雇用チーム）における「出来る」作業を一步一步着実に拡大。スタッフが常に改善へのアンテナを張り「こうだったらいいのに」という何気ない意見も即実行。作業の正確さ・丁寧さが認められていき、「守られるチーム」から「頼られるチーム」となることで障害者への固定観念を払拭した。



## 特別賞・優秀奨励賞

ITツール利活用促進事業（全学教職員・ITツール利活用促進事業チーム  
ITツール利活用コミュニティ）

学部入試（一般選抜）における出願・入学  
手続のデジタル化

本部入試課入試実施チーム

加速するDXに向けた地盤づくり - 東大  
職員専用PADマニュアル作成を通じて -

DX推進のための地盤醸成チーム

学生の経済支援に係るオンライン化

高橋 麻美子（教養学部等教務課）

常に業務改善を意識した意欲的な活動

教育・学生支援部

◎応募（推薦）課題の取組内容（過去のものを含む）は、東大ポータル・便利帳「業務改革（改善）に関する課題の一覧」をご覧ください。

教養教育の現場から

第61回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 東大生が中国の学生とともに調べて考える

／LAP(リベラルアーツプログラム)の日中学生研修プログラム

## 日中の学生が塩の世界を表現

**白** 私は2011年から日中間の学生研修プログラムに携わっています。東大生を中国に連れて行き、中国の学生を日本に呼び、現場に触れて考えるプログラムです。以前から心がけているのは対話の機会を増やすこと。教室で話すだけでなく、ともに何かを調べたり、街で同じ景色を見て議論することを意識しています。

コロナ禍を経て、今年度、現地での活動を再開しました。南京大学の学生10人＋東大生10人で11月25～28日に高知へ行き、地元の塩杜氏・田野屋銀象さんをテーマにワークショップを実施しました。ご本人に取材し、工房を見学して、塩杜氏の世界観をどう表現するのがよいかを5つのチームごとに議論。海と塩は一体だとの思いを受け、海辺で発表会を行いました。塩は料理を引き立てるという見方を踏まえて映画の助演俳優賞のような賞を設定する案、カレンダーと塩を使うレシピを融合させる案など、様々なアイデアが飛び交いました。教室とは違う、激しい潮風と波音のなかでの発表が、参加者には意外でよかったようです。

**朱** 私は2014年に始まった交流プログラム「深思北京」を2016年から担当しています。当初は様々な業界の社会人の話を聞く形でしたが、教養学部と提携した中国人民大学の学生を加え、講師の話に出た題材について学生同士が議論を行う形に変更しました。2021年は「日中Z世代生活誌」、国交回復50周年の2022年には「日中民間交流の現場の声を聴く」というテーマを設定し、オンラインと対面を組み合わせて活動を行いました。

今回は、11月22～28日に東大生8人と北京に赴き、中国人民大学の学生16人とともに活動しました。もう一つの協力者は伝統演劇の社会人団体・北京戯曲評論学会。伝統的な中国と現代中国ではイメージに乖離がありますが、実は両者は繋がっています。重層的に交差する姿を学び、日中双方を冷静に捉える視点を養うため、シンクタンクやメディア、民間・国営の企業の人に話してもらいました。

## 北京の街のスローガンを観察

路上観察のワークショップも行いました。北京五輪の施設の現在を調べるなど、何か問題意識を持って街を歩く試みです。

国際連携  
部門白 佐立  
特任准教授朱 芸綺  
特任助教

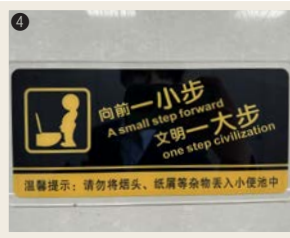
ある学生は街中の標語に注目しました。中国では日本よりも頻繁に標語が見られます。たとえば「向前一小歩、文明一大歩」(小用時の一歩は小さいが文明にとっては大きな歩み)や「節約用紙」(用紙＝トイレトーパー)、習近平政権下のレストランに貼られた食べ残し禁止の標語など、北京の街に当たり前に存在する標語の意味や背景を議論しました。

**白** 国際研修では欧米志向の学生が多く、ビジネス以外での中国への関心は低いです。2011年頃と今では少し状況が違い、中国の学生が日本の情報を多く得ている一方、東大生は中国に対する認識レベルが落ちています。研修を通じて双方のギャップを少しでも埋めたいのですが……。  
**朱** 今回、私は北京側から「無口な学生が多かった」と言われて少し恥ずかしい思いをしました。残念ながら、語学力もコミュニケーション力もコロナ禍以前のほうが上だったように感じます。

**白** 国際交流が大事とは言いますが、東大全体でアジアへの興味を醸成する雰囲気薄いことが学生の意識にも影響しているのではないかと疑いつつ、引き続き小さな一歩を積み重ねたいと思います。



①高知のワークショップの一環として海辺で波音を聞きながらのプレゼンテーション。②塩杜氏の田野屋さんに話を聞く学生たち。③④北京の路上観察ワークショップで報告されたスローガンの画像の一部。「光盘行动」(光盘行動)は「皿を空にする運動」という意味。



# ぶらり 構内ショップの旅

第21回

T-Lounge CREDO@本郷キャンパスの巻

## ゆったり過ごせるカフェレストラン

山上会館一階にあるかどやグループのカフェレストラン「T-Lounge CREDO」。ホテルのラウンジを彷彿とさせるゆったりとした空間で、三四郎池周辺の木々を見ながらランチやお茶を楽しむことができます。コロナ禍の影響でしばらく閉店していましたが、10月23日に営業を再開しました。

ランチメニューは欧風ビーフカレー。特徴はゴロゴロとした大きな牛肉だと話すのは店長の二宮隼一さん。サラダとじゃがバターがついて¥1,300です。プラス¥100でコーヒーか紅茶がつくお得なドリンクセットもあります。



店長の二宮隼一さん

現在は試験的な運営のためランチメニューはカレーのみですが、2024年3月からパスタ、ハンバーグ、ステーキ、メンチカツレツなど、コロナ禍前に提供していたメニューが復活する予定です。

カフェとして利用する人も多く、地下一階の「四季郷土料理かどや山上亭」で食事をしてから、お茶に立ち寄る人もいます。ケーキはモンブランやダブルチーズケーキなど全部で4種類。(各¥580)。飲み物はコーヒー(¥300)、レモンティー(¥300)、愛媛県産温州みかんジュース(¥450)などがあります。欲送迎会などに利用できるパーティープランは4種類(¥6,050~/1人)。二宮さんのおすすめは愛媛から空輸する瀬戸内地魚の船盛りが含まれるプラン(¥7,150/1人)です。インパクトがある舟盛りに歓声が上がることが多いとか。平日は20名から、週末は30名から予約を受け付けています。まずは営業を再開したことを知って欲しいと話すと二宮さん。「今後メニューも増やしていくので、是非いらしてください」

※価格は税込



欧風ビーフカレー。じゃがバターとサラダがついて¥1,300。  
営業時間●平日11:00-15:00 (変更する場合があります。)

<http://www.kadoya-taimeshi.com/kadoyamanage/shoplist/tloungecredo/>

# #WeChange Now

第5回

男女共同参画室通信

## 大学運営の魅力とは

～女性教員向けイベントを開催

2023年12月4日、伊藤国際学術研究センターにて、女性研究者キャリアアップ支援WGの主催で、30%Club大学WGの協力のもと、「大学の未来を考える女性ネットワークワーキング」イベントが開催されました。



カレイディストの塚原月子さん

30%Clubとは、世界で企業などの取締役の女性比率を高めることを目指すリーダーの集まりで、日本では9つの大学のトップが集まる「大学グループ」があり、藤井輝夫総長がチェアを務めています。

本イベントは、本学で2022年度よりスタートした「UTokyo 男女+協働改革 #WeChange」の行動目標II「院生からシニアまでのシームレスな女性研究者キャリアアップ」の一環で、女性リーダー育成プログラムの1つとして行われました。

メンターとしては本学及び岩手大学やNWEC(国際女性教育会館)、30%Clubの参加大学である大阪大学、慶應義塾大学、昭和女子大学などから、副学長など大学運営に幹部としてかかわる先生方が、メンティーとしては本学の総長補佐経験者や他大学から女性教員が参加しました。

本学の総長アドバイザーも務める株式会社カレイディスト・塚原月子さまからのご講演の後、多様なご経歴のメンターの先生方から今のポジションで達成できたことについて他ではなかなか聞くことのできない貴重なお話をいただきました。



その後、5名ずつのグループに分かれ、「自分が組織運営に携わったら実現したいこと」を議論してもらいました。どのグループも真剣な表情あり、笑いありで「もう少し時間がほしかった」という感想がでるほど、大変盛り上がりしました。

(特任助教 中野円佳)

<https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/>

# ワタシのオシゴト 第212回

## RELAY COLUMN

薬学系研究科・薬学部 執行チーム **大久保早織**

### 電卓と図面を片手にオシゴト



安全対策のため先日移設した絵画と

20代の頃お世話になった薬学部に戻り異動してから早3年が経とうとしています。現部署の仕事は、契約業務が大半と思って来ましたが、実際は施設関連業務がとても多く（理系学部で施設担当がないのは薬学部だけとか……）図面片手に日々勉強です。ただ薬学部は研究室との距離が近く、優しい先生方が多いのでとても仕事がしやすいです。2021年夏の火災対応でも、右往左往する事務室を辛抱強く支えていただきました。火災対応を経験し、思い掛けず保険や消防に詳しくなりましたが、大きなピンチを本部も教員も巻き込んで協力して乗り越えられたことが大きな収穫です。施設部のご協力で復旧工事も完成間近です！

プライベートでは小4息子と年中娘のお母さんをしています。日頃の運動不足は日々の送迎2箇所です解消されると信じて、子供達と一緒に良く食べ良く寝てこれからも健やかな毎日を送ってみたいです。



実は着物女子で歴女です

得意ワザ：拡声器いらずのよく通る大きな声  
自分の性格：仕事も家庭も明るく勢いで何とかする  
次回執筆者のご指名：彌富希子さん  
次回執筆者との関係：似たような部署を経験してる同志  
次回執筆者の紹介：向上心と行動力あってすごいです

専門知と地域をつなぐ架け橋に

# FSレポート!

Field Study

第28回

工学部物理工学科4年 **玉腰勇司**

### 魅力ある高校を見つけるために

私は現在、高知県土佐町で、嶺北高校がより魅力ある高校になるためのサポートをしています。

嶺北高校は、土佐町を含む嶺北地域唯一の高校として地域の教育を担う大切な場所です。また、高校が存在することで地域に活気が生まれます。しかし、ほんの5年前に、嶺北高校は廃校の危機に瀕して



嶺北の大自然

の人々の尽力、地域外生徒の受け入れ等により、現在の生徒数は廃校を回避できる水準まで回復しています。しかし、今後も少子化が見込まれる中で高校が存続するために、選ばれ続ける努力をする必要があります。

魅力的な高校とは何なのかを知るためには、実際に通っている生徒に意見を聞くのが一番だと考え、私達は嶺北高校に通う全校生徒を対象にワークショップを考案、開催しました。50分という短い時間で彼らの考えを最大限取り込むために構成を一から考え、また、多くの方に協力をお願いし、無事成功させることができました。同様の形式で地域住民に対してもワークショップが行われ、そのサポートも行いました。

嶺北地域の魅力にも触れることができました。偶々立ち寄ったカフェが地域住民の憩いの場で、地域の話を知ったり、宿で私が財布を紛失した際に一緒に探していただき、飲み物までごちそうになったり(笑)、地域の人々の温かさに触れることができました。また、滝や星々といった山間部にまたがる嶺北地域ならではの大自然を体験することができ、これらの近くにいられることは、嶺北地域の大きな魅力だと感じました。

しかし残念ながら、高校入学人数をすぐに増加させるような抜本的な解決策はありません。実際、入学者数を増やすことに成功した地域外生徒の受け入れも、同様の問題を抱える高校の参入によって競争が激しくなっています。簡単には解決せず、また改善させるのにも年単位の時間がかかる問題の難しさを肌で感じるとともに、それに取り組む地域の人々の力強さを知ることができました。

最後の現地活動では、活動報告を行う予定です。我々が一年間で得てきた学びを形にして伝えたいと思います。



嶺北高校校長へのヒアリング

※メンバーはほかに山代晃聖（理一2年）、小野裕太（教育修士2年）



# インタープリターズ・第197回 バイブル

カブリ数物連携宇宙研究機構教授  
科学技術コミュニケーション部門 横山広美

## 科学を伝えて100年

専門知、特に科学をインタープリターするのに長く、科学雑誌が大きな役割を果たしてきた。成果を取り上げられることはもちろん、雑誌の創刊を支えた本学関係者も多い。子供たちに科学を伝え続けてきた誠文堂新光社『子供の科学』（通称KoKa）が2024年で100周年を迎える。小学校高学年から中学生を対象にした科学雑誌で、小柴昌俊先生をはじめ歴代のノーベル賞受賞者も愛読してきたと聞く。子供に読めるように漢字にはルビがふってあり、親しみやすいカラフルなゆるふわキャラや漫画が掲載されているが、本格的に取材された記事の中身は濃い。初代編集長は原田三夫氏。本学理学部を卒業後に教員を経て、科学ジャーナリストとなり多くの科学雑誌を創刊した。2月号では悲しいお知らせがあった。紙飛行機の付録連載を49年間、続けた二宮康明氏が亡くなった。冊子の最後にいつも紙飛行機の厚紙が入っていて、それを楽しみにしていた読者も多かったであろう。

子供向け科学雑誌として多くの人に親しまれたのが、学研から出ていた科学（『〇年の科学』シリーズ）、である。一度は休刊し、その間に科学の読者だった大人をターゲットにした付録ボックスとセットの『大人の科学』が人気を得た。シルク印刷キットやテルミンmini、卓上ロボット掃除機など、なつかしくも楽しいキットが満載でたびたび話題になった。2022年には「世界とつながるほんもの体験キット」という言葉を掲げ、『学研の科学』として再スタートしている。「水素エネルギーロケット」や「ときめく実験鉱物と岩石標本」などワクワクする内容だ。

両者の共通点は、雑誌という紙媒体のメディアでありながら、科学の楽しみに欠かせない手を動かす楽しさを伝えていることだと思う。『学研の科学』はキットをメインに、KoKaは紙面で工作やプログラミングの方法を伝えることで、それを促している。ネットとの連動や、女性が以前よりも多く登場するなど時代に合わせて変化をしている。

科学雑誌では他にも『ニュートン』が有名である。初代の編集長は理学部を退官した竹内均氏。私が学生時代であったときには、中国、韓国版も出ており、共同研究をしている韓国の学生から日本の雑誌だとなかなか信じてもらえなかった。洗練されたスタイルから、ナショナルジオグラフィックのように欧米の雑誌だと思っていたようだ。大人向けとしては『日経サイエンス』や岩波の『科学』がある。日本の科学雑誌は90年代に廃刊が続き、現状も寂しい状況が続いている。科学を楽しむ心をはぐくむメディアの今後に期待したい。

# ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第51回

社会連携本部渉外部門  
アソシエイト・ディレクター

古林祐佳

## 「推し活」で広がる支援の輪

日本人の2人に1人がかかる可能性があるといわれる「がん」ですが、中でも早期発見や治療が難しい難治性がんの根本的治療法の確立は全ての人々にとっての悲願です。東京大学基金には、現在、難治性がんの治療に関する研究・開発への寄付募集がいくつかあり、これまで当事者やご家族、お知り合い、医療関係者を中心にご寄付をお寄せいただいています。新たな支援の広がりとして今回ご紹介したいのは、20~30代の医療漫画ファンを中心とした推し活（自分のお気に入りのキャラクターなどを応援する活動）の一環としてのご寄付です。

3種の難治性がんをまとめた寄付募集をしていた「スキルス胃癌、膵癌、大腸癌に対する腹腔内化学療法の研究開発基金」は、昨年10月より、それぞれの癌に特化して再スタートしました。「スキルス胃癌および腹膜播種を伴う胃癌に対する腹腔内化学療法の研究開発基金」（以下、スキルス胃癌基金）には、これまでの主な寄付者層ではない方々からのご寄付が続けて入り始めました。「K2」という医療漫画の読者の方々でした。

K2は医療漫画の金字塔としてよく知られているので存じの方も多いかもかもしれませんが、主要キャラクターの一人が患うスキルス胃癌を、「スキルス胃癌基金」が研究開発を進めている腹腔内化学療法で治療するシーンが描かれています。このキャラクターへのファンの強い思いが、現実世界での治療法確立への願いとなり寄付につながったのです。ファンによるSNSを通じた呼びかけは広く拡散し、まさに「推し活」から広がった「支援の輪」でした。

ある寄付者の方は「医療漫画K2を読み、スキルス胃癌のことを知りました。自分にも何かできることはないかと思っていたところ、SNSでこの寄付募集を知りました」というメッセージをお寄せくださいました。スキルス胃癌基金だけではなく、「何かできることはないか」と思っている方々に東大基金を知っていただき推し活をしてくださる東大ファンを増やしていきたいと思います。

こ  
ち  
ら  
か  
ら  
胃  
→  
腸  
基  
金  
は  
ス  
キ  
ル  
ス



腹腔内化学療法とは、癌の転移（腹膜播種）が散らばっているお腹の中に抗癌剤を直接注入する治療法です。一般的な静脈内注射より極めて多い量の薬を腹膜播種に届けることができます

**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
12月8日	本部学術振興企画課	「研究評価に関するサンフランシスコ宣言」への署名
12月11日	本部国際研究推進課	第13回日中学長会議を広島で4年ぶりに対面開催
12月11日～ 12月26日	広報室	大江健三郎のデビュー作「奇妙な仕事」と犬＝村上克尚   ここ掘れワンワン! UTokyo 犬コレクション+犬コネタ集   寄稿「犬と研究者」   キャンパス散歩 - ニューヨークオフィスの巻 / 『淡青』47号
12月13日	本部広報課	令和5年度退職教員の最終講義12月・1月開催分のお知らせ
12月13日	本部国際戦略課	東京フォーラム2023が11月30日、12月1日に開催
12月15日	本部学生支援課	東京大学硬式野球部による東大球場「あそび場」開放企画を実施
12月20日	新領域創成科学研究科	「今、柏の葉で起きていること～地域連携、社会貢献に向けて～」を開催
12月21日	広報室	好機を逃さず、初志貫徹した小型衛星ビジネスのパイオニア Entrepreneurs 22
12月22日	本部協創課、本部社会連携推進課	AI Forum 2023 開催報告「AI Synergy : Science and Society」
12月22日	本部協創課	日立東大ラボがインベリアルカレッジロンドンとの合同ワークショップを実施
12月26日	情報基盤センター、本部情報支援課	次期学習管理システム (UTOL) ロゴマークを学内公募
12月27日	未来社会協創推進本部、情報基盤センター	データ活用社会創成シンポジウム 2023 を開催
12月27日	未来ビジョン研究センター	専門家は温室効果ガス削減目標の実現可能性をどのように考えているか?
12月28日	生産技術研究所	虫明 功臣 名誉教授が令和5年秋叙勲 瑞宝中綬章を受章
12月28日	生産技術研究所	岡田 恒男 名誉教授が日本学士院会員に選定
1月4日	本部入試課	令和6年度大学入学共通テスト東京大学本郷地区試験場案内
1月4日	本部広報課	石川県能登地方を震源とする地震について (藤井総長メッセージ)
1月5日	本部広報課	2024年 藤井総長年頭挨拶
1月9日	本部渉外課	文学部と北海道北見市がふるさと納税を活用した連携協力を開始
1月10日	広報室	犯罪予測システムによって「世界の悲しい経験を減らす」 Entrepreneurs 23
1月11日	総合文化研究科・教養学部	「コマバのユーラス」LINEスタンプ販売開始

## CLOSE UP 硬式野球部が東大球場「あそび場」開放企画を実施 (本部学生支援課)



子供たちと遊ぶ本学硬式野球部員

12月9日、硬式野球部による東大球場「あそび場」開放企画が実施されました。ボールあそびのできる広い公園が少ないため、外で遊ぶ子どもが減少しているという問題に着目し、野球場を公園として子どもたちに開放しようと企画されたものです。今年は硬式野球部が所属する東京六大学野球連盟の加盟校が足並みを揃えて実施しました。本学硬式野球部が文京区の後援のもと、文京区に在住・在

学中の小学生とその家族に募集をかけたところ、約60組からの応募があり、当日は野球あそびやかけっこ、フリスビーなどの思い思いのあそびを部員20名と一緒に楽しみました。参加したご家族からは、「ボールで遊べる公園が少なく残念に思っていたが、今日はボールを使っただけのびび遊ぶことが出来た」「制限なくボール遊びができて、すごく楽しかった」などのご感想をいただきました。

## 表紙について

本誌には、新年1号目の表紙に干支の動物にまつわる画像を掲載する習慣があります(1978年1月発行の392号から)。吉例に則り、辰年の今回は、インターメディアテクに展示されている「田口和美像」(1894年/高橋勝蔵画/布に油彩/医学系研究科細胞生物学・解剖学講座所蔵)を掲載しました。像主の田口和美(1839-1904)は医学部解剖学教室の初代教授。この肖像は、1893年設立の日本解剖学会の会頭を務めた頃のもので、学内に現存する最古の肖像画と言われています。作者の高橋勝蔵(1860-1917)は、サンフランシスコのデザイン学校で油絵を学んで1893年に帰

国し、翌年に明治美術会で滞米作品を公開して話題を呼んだ画家。「田口和美像」はこの年の制作です。画内に辰年に関わるものがあるわけではなく、額縁に見事な2匹の龍が人の頭蓋骨とともに彫刻されています。なぜ龍が彫刻されたかは不明です(像主が亡くなった1904年は辰年ですが……)。1998年に総合研究博物館特別展で学内の肖像(画+彫刻)140点を展示した木下直之先生(現・静岡県立美術館長)は、著書『博士の肖像』(東京大学出版会/1998年)の巻頭でこの画を紹介し、「龍と人の頭蓋骨の彫刻を配した額縁は珍しい」と記しています。



明治43年の卒業アルバムに載った田口和美像の写真(医学図書館蔵)。解剖学教室にあった銅像は1994年に出身地(現・埼玉県加須市)に移管されました

**CLOSE UP 「コマバのユータス」LINE スタンプ販売開始** (総合文化研究科・教養学部)



【LINEスタンプ】  
詳細はLINE STOREをご確認ください。  
<https://store.line.me/stickershop/product/24940629/ja>



2023年夏より教養学部の公式マスコットキャラクターを拝命した「コマバのユータス」がLINEスタンプになりました。仲良しのねこさんたちも登場し、普段使いできるデザインのスタンプです。「コマバのユータス」は、東京大学で初のマスコットキャラクターです(2005年)。東京大学からLINEスタンプが発売されるのも初めてのことです。東京大学を目指す高校生から、在学生、卒業生、教職員まで、皆様の日常のコミュニケーションに、「コマバのユータス」LINEスタンプを活用い

ただけましたら幸いです。東京大学に入学した全ての学生が最初に学ぶ教養学部で長く愛されてきた「コマバのユータス」をこれからもどうぞよろしく願っています。

【コマバのユータス基本情報】  
出身：からす座の銀河  
年齢：永遠の18歳 特技：全力を尽くす必要があるが、一応自力で飛べる 身長：1m 体重：40kg 誕生日：4月12日(東大記念日と同じ) 好物：ラーメンとパフェ 仲良し：駒場1キャンパスのネコ



**CLOSE UP 第13回日中学長会議を広島で4年ぶりに対面開催** (本部国際研究推進課)



日本側からは19大学5機関、中国側からは18大学1機関が参加しました。日中双方の大学長が一堂に会し、両国の高等教育について議論する日中学長会議にて、本学は北京大学とともに幹事校(調整機関)として会議運営に携わっています

11月28日～29日、第13回日中学長会議が広島大学の主催により4年ぶりに対面で開催され、本学からは藤井輝夫総長、林香里理事・副学長、渡邊聡総長特任補佐が出席しました。

開会にあたり、日本側幹事校である本学の藤井総長より、中国の思想家・孔子の言葉である「朋有り遠方より来る。また楽しからずや」を引き、4年ぶりの対面開催ができたことへの賛辞と、学友の意味を持つ「朋」とのますますの交流を期待する旨の挨拶がありました。

本会議では、「多様性と融合～これからの時代に求められる人材と高等教育～」のテーマのもと、「ポストコロナの新しい大学教育・

ICTの活用」および「気候変動・地球規模課題への挑戦」を議題として、日中各大学の発表と活発な議論が行われました。本学は「気候変動・地球規模課題への挑戦」の議題にて、2050年までにカーボンニュートラルを達成する「Race to Zero」キャンペーンに日本で初めて参画した国立大学として、「東京大学サステイナブルキャンパスプロジェクト(TSCP)」を立ち上げ、本学のCO<sub>2</sub>排出量の削減を実施している等の取組みについて発表しました。

日中学長会議は、2年に1度、日中交互に開催しており、今回は2025年に華中科技大学(中国・湖北省武漢市)で開催されます。

**CLOSE UP 日立東大ラボがICLとの合同ワークショップを実施** (本部協創課)



今後も東大とICLと日立の3社との間で継続的なディスカッションの機会が設けられ、ワークショップの成果を産学協創フォーラム等で共有していく予定です

11月2日、日立東大ラボにて日立製作所・Imperial College London共同研究センターとの合同ワークショップを実施し、日立東大ラボとImperial College London (ICL) の代表者がエネルギーシステムの将来と国際的協力の在り方について議論しました。東京大学とICLは、昨年5月に脱炭素技術やクリーンテック技術の創出に関する戦略的関係の構築に合意する趣意書(LOI)を締結しました。本ワークショップは連携強化に関する具体的な取組の第一歩に位置づけられています。

パネルディスカッション第1部では、「Future challenges in energy system」と題し、再生可能エネルギーに関する制度面や技

術面での課題について議論しました。喫緊の課題として、分散エネルギーマネジメント、配電網最適化、技術イノベーションと制度面での連携、サプライチェーンと技術開発、電力供給の安全保障とバランスが挙げられました。第2部では、「Social transition and international cooperation along with energy transition」と題して、カーボンニュートラルへの移行に関する国際的な課題や協力の在り方について議論しました。日英のカーボンニュートラルへの移行は方向性は適切だがスピードが遅いという共通点が指摘され、行政や企業に対する意思決定のための科学に基づく情報提供の重要性が議論されました。



**UTOKYO 「ハナーンチョコレート」が紡ぐ思いやり**

ハナーンチョコレートは、ハラール認証制度によってイスラム教徒とそれ以外の人々の食卓や生活が分断されることがないように、認証制度に代わるよい方法がないかを考えるきっかけと作られました。ハナーンはアラビア語で「思

いやり」「やさしさ」の意味。認証マークを初めて見た人もこれがあるから安心だと思った人も、一緒に「よりよい未来」について考えてほしいと願っています。大切な人へ思いやりのプレゼントを贈ってみませんか? (福)

UTCCからのお知らせ  
[utcc.u-tokyo.ac.jp](http://utcc.u-tokyo.ac.jp)



BOX ¥1,250  
ミルク ¥750 (税込)  
カカオ70% ¥750



## 総合知

最近、総合知という言葉聞く機会が自分の周辺でも増えてきた。総合知とは、内閣府の取りまとめによると「多様な『知』が集い、新たな価値を創出する『知の活力』を生むこと」となっている。自分は自然科学、その中でも特にポリマーを専門としており、個人レベルでの交流は別として、人文・社会科学との研究上での接点は正直のところこれまであまり強く無かった。ところが最近、ポリマーの分野でも人文・社会科学との連携が非常に重要になってきた。

ポリマーは軽くて便利なことから我々の周りに満ち溢れるようになり、海に流れ込むプラスチックを契機として「プラスチック汚染」という言葉まで登場し、プラスチック汚染に関する法的拘束力のある国際文書（条約）の策定が約160か国の国連加盟国によって議論されている。理想的なポリマーとは、使用時には強靱で耐久性があって長期間利用することができ、劣化した場合には回収後にリサイクルによって元の性能まで回復可能であり、しかも様々な止むを得ない理由で海洋を含む環境中に流出した場合には速やかに分解して

水と二酸化炭素に還元する材料であるが、そのようなポリマーは現時点では存在していない。現在のポリマーが理想的な材料に置き換わるためには、資源循環に配慮した分子設計や材料開発はもちろんだが、現在よりも価格が値上がりすることから、普及のためには消費者や生産者の意識改革や行動変容が必須となるだけでなく、法規制やビジネスモデルさらには社会システムの変革もグローバルなレベルで必要となる。このような材料への価値観が大きく変化する時代には、自然科学と人文・社会科学の協創すなわち総合知がますます重要になってくる。

東京大学には文系・理系の我が国を代表する叡智が集結しており、総合知の威力が発揮できる場だと思われる。そのような環境を十分に活用することで、地球規模の課題についての革新的なアイデアや世の中を変えるようなブレークスルーが多数出てくることを心から期待している。

伊藤耕三  
(新領域創成科学研究科)

